（別紙様式３）

令和４年３月 31 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　北海道札幌市中央区北３条西７丁目
管理機関名　北海道教育委員会
代表者名　　倉　本　博　史

令和３年度（2021 年度）地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
令和３年（2021 年）４月１日（契約締結日）～令和４年（2022 年）３月 31 日

２　指定校名・類型
学校名　　北海道登別明日中等教育学校
学校長名　志　知　芳　彦
類型　　グローカル型

３　研究開発名
AKB Future Project 2nd Stage ～北海道と世界の明日を創る

４　研究開発概要
高齢化社会が進行する日本において，地域を活性化し，あらゆる年代が住みやすい環境を整えることが必要である。地域をフィールドとして，関係機関と連携し，社会課題の解決に向けた学びを深め，解決法を提案，実践することで，地域への理解や愛着が深まり，主体的に考え行動する力を身に付けた地域人材を育成する。
３回生の「世界と日本・北海道のつながり」を通してＳＤＧｓについて学習し，４回生以降の課題探究は，ＳＤＧｓの視点と関連させて探究活動を進める。５～６回生では，課題探究の取組の深化を図るとともに，自己のキャリアデザインを確立させる。

５　学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無
・学校設定教科・科目　　開設していない
・教育課程の特例の活用　　活用していない

6　運営指導委員会の体制

氏　名	所属・職	備　考
藏中　貴康	北海道胆振総合振興局地域創生部地域政策課主査	
服部　　仁	登別市役所総務部企画調整グループ総括主幹	
白鳥　金吾	北星学園大学短期大学部准教授	
山川　裕之	株式会社丸ヨ池内経営企画部長	
岩渕　啓介	北海道教育庁学校教育局高校教育課主査	管理機関担当者

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和３年 10 月 15 日	令和３年度 第１回運営指導委員会（書面会議） ・事業の概要と進捗について説明し共有を図る ・これまでの活動実績の成果と課題の総括の説明
令和３年 11 月６日	令和３年度 第２回運営指導委員会 ・同日に開催された成果発表会視察 ・指導・助言に対する返答，改善策の実施状況報告

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
北海道教育庁胆振教育局	教育支援課長　赤川　欣胤
北海道胆振総合振興局	地域政策課長　野々村　貴寅
登別市	総務部長　　松田　毅
登別市教育委員会	教育部長　　堀井　貴之
登別市社会福祉協議会	地域福祉課長　坂本　大輔
登別商工会議所	常務理事　　山本　　靖
登別国際観光コンベンション協会	専務理事　　大野　　薫
室蘭工業大学	理事副学長　　松田　瑞史

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和３年５月	ワーキンググループによる，４回生の地域課題探究のテーマ設定に関わる探究面談
令和３年７月	ワーキンググループによる，４回生５回生校内ヒアリング
令和３年 10 月 22 日	令和３年度 第１回コンソーシアム会議 ・事業の概要について説明し共有を図る ・これまでの活動実績の成果と課題の総括 ・ワーキンググループ活動の報告
令和３年　11 月６日	令和３年度 第２回コンソーシアム会議 ・同日に開催された成果発表会視察 ・生徒の活動とコンソーシアムの協働について，事例を交えて説明 ・持続的なコンソーシアムの在り方について検討

8　カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏　名	所属・職	雇用形態
海外交流アドバイザー	明山　　崇	株式会社ＩＳＡ札幌支店	都度依頼・令和３年度は謝礼支払なし
地域協働学習支援員	髙橋　敏夫	登別福音教会主任牧師	都度依頼・謝礼支払なし

活動日程・活動内容（海外交流アドバイザー）

海外オンラインプログラムを実施するに当たり，異文化理解やニュージーランドの教育事情等のオンラインプログラムの事前準備に対する助言に加えて，私たちの地域が抱える諸問題について，多面的な視点から捉えて解決策を考えていくためのプログラム作りに対する助言をいただいた。

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム会議							第1回	第2回				
運営指導委員会							第1回	第2回				

（2）実績の説明

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・海外の高校との交流事業の展開等，ＩＣＴの環境を整備するとともに教員の加配を行った。

・第１回コンソーシアム会議において説明された，今年度上半期の活動及び今後のスケジュールなどについて共有を図った。

・第１回運営指導委員会（書面会議）において，昨年度の運営指導委員会の意見を踏まえて改善した本校の取組について説明するとともに，その取組について委員から意見を聴取した。

・総合的な探究の時間（地域課題探究，キャリア課題探究）の充実に向けた指導・助言を行った。

・グローバルな視野を醸成する取組（ＩＣＴを活用した海外の高等学校等との交流授業，海外フィールドワークなど）への指導・助言を行った。

・グローバルな視野を醸成する取組（ＩＣＴを活用した海外の高等学校及び大学等との交流授業，オンライン短期留学プログラム，海外オンラインプログラムなど）への指導・助言を行った。

・第２回運営指導委員会（成果発表会）において，これまでの取組の成果等について説明するとともに，生徒の課題研究の成果発表を参観した。また，今後の展望等について委員から意見を聴取し，本事業終了後における取組の改善充実について共有した。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

・本校と地域との連携，課題探究への活用については，AKB Future Project 委員会を中心に実践を進めており，事業終了後も継続できる見通しである。

・コンソーシアムに関しては，次年度以降の運用を通して，コンソーシアム体制の在り方の構築と改善を図るとともに，事業終了後においてもコンソーシアムの取組を継続することとしている。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

登別市及び登別市教育委員会と協定書締結済み。

１０　研究開発の実績

（１）実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
４回生「総合的な探究の時間」における「地域課題探究」	1回	3回	4回	2回	1回	2回	3回	6回	2回	1回	3回	4回
５回生「総合的な探究の時間」における「キャリア課題探究」	2回	2回	1回	1回		3回	4回	4回	1回			
６回生「総合的な探究の時間」における「学びのプロジェクト」	2回	3回					4回	4回				
海外オンラインプログラム						1回				1回		
イングリッシュデイ									1回			

（２）実績の説明

ア　研究開発の内容や地域課題研究の内容について

(ｱ) 総合的な学習の時間　対象：３回生（中学３年生相当）

・「世界と日本・北海道のつながり」において，持続可能な社会づくりの視点を育成し，次年度からの地域課題探究の基礎となる取組を実施した。

・指定期間において，コンソーシアム構成団体をはじめとする地域の事業所と協働し，地域の教育資源を活用する体制を構築することができた。

(ｲ) 地域課題探究　対象：４回生（高校１年生相当）

・総合的な探究の時間において，地域課題探究を実施した。

・社会と情報の時間において，データ活用や情報発信の手法を指導した。

・地域の課題について，持続可能な社会の視点を持って学びを深め，グループごとに課題とその解決方法を考え，フィールドワークを通して検証や実践を行った。

・地域協働学習実施支援員やコンソーシアム構成団体のコーディネートにより，生徒の探究テーマを踏まえて行政・民間企業やＮＰＯとの連携を広げた。

・令和３年度は，新型コロナウイルス感染予防のため他校（札幌開成中等教育学校等）への訪問・課題探究交流を断念したが，代替として登別温泉魅力を発信するプロジェクト学習を実施した。生徒自身がアポイントを取って取材し，英語による紹介動画を制作した。生徒にとっては，地域の魅力を発見し，課題を見つめなおす機会となった。
・本事業により，コンソーシアム構成団体の協力に基づく講演会，校内ヒアリング，ワークショップなどを実施する体制を構築することができた。

(ｳ) キャリア課題探究　対象：４回生後半～５回生（高校１年生～２年生相当）
・総合的な探究の時間において，キャリア課題探究を実施した。
・４回生での課題探究の経験をもとに，各生徒のキャリアデザインをさらに促すため，各生徒が自分の興味・関心などに基づき，各自のキャリアと関係するテーマを設定した。
・探究ごとに課題とその解決方法を考え，フィールドワークを通して検証や実践を行った。
・地域協働学習の支援員やコンソーシアム構成団体のコーディネートにより，生徒の探究テーマを踏まえて行政・民間企業やＮＰＯとの連携を広げた。
・生徒は，各自のテーマについて英語によるレポートを作成した。
・本事業により，地域の関係諸機関と協働を重ね，「生徒自身が設定したテーマをもとに，地域をフィールドとして探究する」という学習スタイルを地域にも浸透させることができた。

(ｴ) 総合的な学習の時間　対象：６回生（高校３年生相当）
・自分の将来及び卒業後の学びをプロジェクト化し，アクションプランを作成した。
・これまでの探究活動を振り返り，世界や地域で活躍する自分を具体化した。
・本事業により，課題探究の成果等を進路活動に活用する生徒が増加し，それを支援する進路指導体制の充実が見られた。多くの生徒が，自己の探究テーマに基づき進路を選択したり，学習の成果を志望理由に活用したりしていた。また，卒業後に，社会と関わる活動に積極的に関わろうとしている生徒も多い。

イ　地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け
（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間，学校設定教科・科目等）

(ｱ) ３回生（中学３年生相当）：総合的な学習の時間
(ｲ) ４回生（高校１年生相当）：総合的な探究の時間，
社会と情報（情報収集，データ処理，情報発信）
(ｳ) ５回生（高校２年生相当）：総合的な探究の時間
(ｴ) ６回生（高校３年生相当）：総合的な学習の時間

ウ　地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させた教科等横断的な学習

(ｱ) 英数国：探究の基礎，探究リテラシーに関係する指導（スピーチ，討論）
(ｲ) 世界との比較：地理歴史，公民，保健，家庭，情報で実施
(ｳ) 単元配列表の作成

エ　類型毎の趣旨に応じた取組について

(ｱ) グローバルな視点をもち，地域課題の解決を考える取組
・世界と日本・北海道のつながり（１月～３月，３回生全員）：ＳＤＧｓについて分担して学習することで世界の課題と目標に関する知識を身に付ける。また，コンソーシアムの協力のもと，地域人材による校内ヒアリングを行い，地域の状況を知る。その上で，ＳＤＧｓを地域課題と結び付けて考えるワークショップを実施した。
・地域課題探究（４月～10 月，４回生全員）：前年度末に学んだＳＤＧｓと地域に関する知識を踏まえ，地域課題を発見し解決策を探究する活動を実施した。地域でのフィールドワークを必須としていたが，新型コロナウイルスの流行状況を踏まえ，実地でできない場合は電話やオンラインで実施した。地域課題に対する当事者意識を涵養し，課題解

決に向けた行動力の育成を図った。

・キャリア課題探究（４回生 10 月～５回生，４～５回生全員）：５回生は前年度に生徒各自が設定したテーマを探究した。４回生は，10 月までの地域課題探究を踏まえ，新たに設定したテーマで探究活動を開始した。テーマ設定の際「５つのユニット」により地域課題との関連を，ＳＤＧｓにより世界の課題との関連の意識付けを図った。

(ｲ) 外国語教育に関する取組

・地元小学校での英語授業実施（４回生全員）：教える側に立つことで，相手に配慮し理解しやすい説明をするよう意識付けを図るとともに，英語を母語としない話者とのやり取りについて工夫を図ることができた。

・海外とのオンライン会議（後期課程全ての回生）：習得した英語を活用することで英語学習に対する意欲を喚起し，その場で応答や質問をまとめるコミュニケーションの即興性を意識付けて行った。また，地域やお互いの国を比較しながら相違点をまとめることで，地域及び自国の魅力等について再発見することができた。

・英語による地域紹介及び観光案内動画作成（４・５回生全員）：英語科の授業の一環で実施した。これにより，地域(市役所及び観光協会)との連携をさらに深めるとともに，地域及びその観光地について世界に紹介するというアウトカムが進捗した。

・課題探究のエッセイライティング（５回生全員）：海外見学旅行が実施できなかったことで，キャリア課題探究の成果を英語でまとめ，アカデミックスキルの基礎を身に付けた。グループワークやディスカッション，プレゼンテーションなど今後の取組で身に付けてきた力を実践・表現する機会とすることができた。

・イングリッシュデイ（４・５回生希望者）：海外からの留学生を交えることで多様性を尊重し,英語力の向上を図るとともに批判的思考を養う取組。自然災害をテーマとし ALT による英語での講義を受け知識を習得し，留学生と協働して対象地域における避難方法を検討する活動を行った。プレゼンテーションやディスカッションを通じて身に付けた力を実践の場で生かすことができた。

・留学生受入：長期プログラム１カ国１名（インドネシア１）

(ｳ) フィールドワーク

・海外オンラインプログラム

日程	内容
令和３年９月 27 日 ～９月 30 日 ４回生７名，５回生５名 ニュージーランド	・ニュージーランドの高校生と，お互いの伝統や文化，地域が抱える諸問題，個人で探究した内容についてプレゼンテーションやディスカッションを通して，交流活動を行うとともに，伝統や文化，諸問題への理解を深めた。また，個人探究における多様な視点を獲得することもできた。さらに，実施後に，交流時のプレゼンテーションスライドを活用して，ニュージーランドの地域の伝統や文化，地域の諸課題の解決策を模索した交流について，参加生徒が他の生徒や外部団体に紹介することで，交流活動の成果を学校全体及び地域へ還元した。
令和４年　１月 31 日 ～　２月１日 ４～５回生８名， オーストラリア	・社会的または国際的なテーマを取り上げ，オーストラリアのニューサウスウェールズ州が進める独自の政策及び取組や，その取組に伴って生じている課題について理解するとともに，ディスカッションを通して課題の捉え方や改善点を提示した。また，個々の探究テーマを発表するとともに，予想される問題点についてディ

	スカッションを行い，新たな視点を獲得するとともに，その後の探究の方向性を確認することができた。今後は，活動レポートや探究活動の成果物作成に加え，オーストラリア独自の取組を英語の授業において発表したり，活動の様子を校内に掲示したり，学校ホームページにアップロードすることによって全校生徒及び地域へ還元していく予定である。

・地域フィールドワーク（４～５回生全員）：インターネットや文献調査，地域の方を学校に招いて行う校内ヒアリング，伴走する教員との面談による情報収集にもとづき生徒自身がフィールドワーク先を探した。この際，登別市役所や登別市社会福祉協議会等のコンソーシアム構成団体からも，多くのフィールドワーク先を紹介いただいた。

・登別市市制 50 周年記念事業の一環として，次のテーマを設定したグループと，関係諸機関との協働が実施された。

「未知の駅を作る」

→期間限定の「未知の駅」の実施が困難となったが，提案書作成及び駅の模型製作に方針を変更して協働を継続。

「市内での経済循環促進」

→市役所の飲食店助成事業の一環として，他校生徒と協力しグルメブックを作成。

→市役所と協働して地元食材を活用した調理動画を撮影・編集。

→市役所と協働してグルメカードを作成。活用方法を提案して市内に配布。

「Be Smile プロジェクトの一環としてアニメ・紙芝居制作」

→制作した成果物を市内の保育所や幼稚園に配布。

→感染予防対策を行った上で，読み聞かせを実施する予定。

オ　成果の普及方法・実績

(ｱ) 発表による成果共有

・他校の校内研修における事例共有（4/5 オンライン）：札幌日本大学高等学校の教職員対象校内研修において，課題探究と進学実現との相関について本校の事例を紹介した。

・長野県教育委員会における事例共有（7/2 オンライン）：長野県内の高校教員を対象とした研究会において，課題探究と進路実現との相関について本校の事例を紹介した。

・長野県高等学校長会での事例共有（8/5 オンライン）：長野県内の高等学校長を対象とした研究会において，評価に関わる話題の一つとして本事業について紹介した。

・No Maps Conference 2021（10/17 オンライン）：民間企業を含む教育関係者を対象とした研究会において，本校の事例を紹介した。

・道教委主催の「文部科学省・北海道教育委員会研究指定事業等における成果発表交流会」（11/22 オンライン）：北海道内で指定事業に取り組んでいる高等学校を対象とした研究会において，本事業の成果等を報告した。

・道教委主催の「高校生ミーティング」（12/3 オンライン）：本事業に取り組んでいる北海道内の高等学校（アソシエイト２校）に対して，本事業の成果等を報告した。

・令和３年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット（1/20 オンライン）：「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」指定校を対象とした研究会において，本事業の成果を報告した。

(ｲ) web サイトを活用した情報共有

・本校公式 web サイト上に，本事業に関わるページを開設し，課題探究の実践に関する情報と使用した資料やテンプレートをアップしている。

(ｳ) 雑誌への掲載

・『「探究」への導き 2022』（大学新聞社）：「探究ルポ」において紹介された。
・『キャリアガイダンス』（５月発行，リクルート）：学校内外での「対話」を重視する実践例として取材を受けた。課題探究の設計だけでなく，「対話」そのものを探究した生徒も紹介された。
・『月刊高校教育』（６月号，学事出版）：田村学氏・廣瀬志保氏「『探究』を探究する」において，地域協働の事例として紹介された。
・『VIEW next 高校版』（８月号，ベネッセ教育総合研究所）：「マイストーリー」特集の中で，課題探究や教科学習の振り返りが紹介された。

１１　目標の進捗状況，成果，評価

（１）アウトカム

アウトカム　項　目	R1 年度	R2 年度	R3 年度	目標
ふるさとや北海道について日本語や英語で世界の人に紹介できる	80.4%	68.8% △11.6	99.2% +30.4	100%
諸外国の人々との交流，異文化や生活習慣を知ろうとする意欲が高まる	90.5%	91.0% +0.5	91.2% +0.2	100%
将来地元での就業を希望する生徒（北海道内） ※将来地元での就職も視野に入れている生徒（北海道内）	13.5% ※73.6%	26.6% +13.1 ※81.3% +7.7	18.2% △8.4 ※54.5 △26.8	60%
将来，地方創生に関わる仕事への就業を希望している生徒 ※将来，地方創生に関わる仕事への就業も視野に入れている生徒	24.3% ※87.8%	17.8% △6.5 ※84.0% △3.8	11.6% △6.2 ※85.1% +1.1	50%
課題研究活動を通じて，地元への理解が深まる	83.8%	82.1% △1.7	86.6% +4.5	80%
物事を考えるときに，必要なデータや情報を探すことができる	66.9%	73.0% +6.1	84.3% +11.3	80%

・意識調査対象学年すべてが英語による地域紹介動画の作成を経験したことにより，「ふるさとや北海道について日本語や英語で世界の人に紹介できる」は 100%に近付いた。

（２）アウトプット

アウトプット　項　目	R1 年度	R2 年度	R3 年度	目標
課題研究に関する検討会議の開催回数	７回 (70%)	13 回 (130%)	10 回 (100%)	10 回
課題研究に関する研究授業の実施回数	１回 (25%)	０回 (0%)	０回 (0%)	４回
先進校としての研究発表回数	４回 (80%)	８回 (160%)	６回 (120%)	５回
地域課題解決のための行動を起こした生徒 ※自らプロジェクトを企画運営した生徒	13 人 (43%)	38 人 (127%)	22 人 (73%)	30 人
コンソーシアムの構成団体数	９団体 (128%)	８団体 (114%)	８団体 (114%)	７団体
地域課題探究または発展的な実践に協働する地域の外部人材の参画状況	延べ95 人 (633%)	延べ40 人 (267%)	延べ62 人 (413%)	15 人
コンソーシアムの活動回数	１回 (50%)	２回 (100%)	４回 (200%)	２回
海外からの旅行者への英語による観光案内ができる生徒数	95 人 (271%)	75 人 (214%)	145 人 (414%)	35 人

・「地域課題解決のための行動を起こした生徒」は，令和２年度よりも減少している。これは現５回生（高２生）がコロナウイルス流行の影響で初期のプログラムを充分に受けられなかったことが原因と考えられる。一方，令和２年度の達成率は 127%となっており，ここから，地域と協働して実践してきた本事業の有効性について評価が可能であると考える。

本校生徒が入賞した・選抜された外部イベント	結果
まちづくり鬼合宿！　登別ハッカソンキャンプ	入賞
次世代リーダー養成塾	１名　選抜
学生によるオレンジリボン運動	映像配信による活動報告 12 校（58 校中）への選出
全国高校生フォーラム	１組　参加
全国高等学校グローカル探究オンライン発表会	英語部門：銅賞 日本語部門：銅賞
マイプロジェクトアワード 2021 東日本 Summit	４組　出場
マイプロジェクトアワード 2021 全国 Summit	未定（３月下旬）
Ｃｈａｎｇｅ　Ｍａｋｅｒｓ　Ａｗａｒｄｓ	１組　書類選考通過
Ｂ－Ｐアワード	北海道代表として推薦

＜添付資料＞目標設定シート

【補足説明】

本事業は，後期課程に所属する全生徒を対象として実施しているが，2019 年度の４回生から年次進行で導入を進めたことから，2021 年度は，後期課程の全てが事業対象者となり，目標シートの「本事業対象生徒以外」には該当がない。

また，地域との協働による課題研究活動については，2019 年度の５回生から実施しているため，2020 年度以降の「本事業対象生徒以外」には該当がない。

１２　次年度以降の課題及び改善点

（１）課題探究（地域課題探究，キャリア課題探究）

・生徒が，探究活動を通じて企画・実行するプロジェクトの趣旨と，開校の精神である「明日を創る」との整合を図った。今後においても，個々の探究が，地域や世界の課題と接続するよう意識して展開する必要がある。

・生徒の内発的動機からテーマを設定する学習プログラムは実践できているものの，修得した知識を活用しきれていない。そのため，教科の知識や文献調査等で得られた知識の活用を一層強化する必要がある。本校では，新学習指導要領実施に向けて，総合的な探究の時間を軸とする単元配列表を編成しており，それらを効果的に活用することにより改善を図る。

（２）コンソーシアム構築

・令和３年度は，ワーキンググループの活動を複数回実施することができた。今後においても継続するため，近隣の他校の参加を促していく予定である。

・地域との協働における主体が学校に偏重しており，現状では，学校のカリキュラムに対して地域の協力を仰ぐというスタイルとなっている。そのため，今後においては，関係諸機関との連携を一層深め，各種取組の運営主体を多元化できるように改善を図っていきたい。

（３）ロジックモデル

・新型コロナウイルスの影響により活動が制限され，特に，５回生に対しては，初期の指導が不十分となり，課題探究の深まりも不十分であった。当該学年においては，ロジックモ

デルの再編や回復が困難であった。

・一方，昨年度に卒業した学年においては，本校卒業後の取組の様子にも成長が見られており，積極的に社会と関わり課題を解決しようとする卒業生が増え，ロジックモデル構築の成果が見られている。こうした成果を本事業の成果として普及し，卒業生のＵターン就職や地域の活性化につなげていく必要がある。

（４）地域リーダーの育成

・活動が制限された５回生に対して，キャリア課題研究におけるスピーチ等を実施したことにより，将来の社会貢献への意思やキャリア形成意識に伸長が見られた。今後は，課題探究によるキャリア形成と，それ以外の教育活動におけるキャリア形成との連動を図っていく必要がある。

・５回生の中には，地域との協働に対して消極的な態度で臨む生徒が多く，課題探究をやらされているという感じが見受けられた。しかし，ICT 等の活用により，初期指導を一定水準に保つことで，新型コロナウイルス流行下においても，探究学習の意識付けなどを指導することができた。今後においても，ICT を積極的に活用していく必要がある。

（５）海外フィールドワーク訪問先の変更

・４～５回生の海外オンラインプログラムを次年度も継続して実施する。実施予定時期を早めることで６回生も対象に広げ，英語でコミュニケーションをとることに加えてグローバルな問題の解決に興味を持つ生徒の意欲や関心を高めていく。

・次年度以降においても，オンラインプログラムの種類を分けることで，異文化理解から，アカデミックスキルの基礎を培うことまで生徒の実態に合わせて幅広く対応していく。

・フィールドワークで取り上げた，出生率の低下・少子高齢化といった問題や，観光重視の政策等については，日本のみならず，北海道や登別という地域にも共通しており，フィールドワークで得られた成果について，今後の個々の課題探究に還元していく。

（６）その他

・コンソーシアムを活用し，構成団体や地域の事業所と連携した活動を増やしていく。また，近隣の他校との教育活動においても，本事業により構築したコンソーシアムを活用できるよう，利便性及び汎用性を高めていきたい。

・次年度以降において，当面は，本校がコンソーシアムの運営主体を担うこととするが，地域の関係諸機関が，本校の取組に主体的に関わる機会を増やし，将来的には，地域の自治体や民間の事業所が運営主体を担えるようにしていきたい。

【担当者】

担当課	学校教育局高校教育課	ＴＥＬ	011-204-5764
氏　名	岩渕　啓介	ＦＡＸ	011-232-1108
職　名	主査	e-mail	iwabuchi.keisuke@pref.hokkaido.lg.jp